

子ども、大人、NPOや企業などの団体が関わり合う市内の取組
(十日市場中学校地域交流事業、リビングラボ、子どもアドベンチャー)

	概要	きっかけ	学校の関わり	子どもたちの変化	大人の変化	運営について	事業のポイント	キーマン	事業の様子①	事業の様子②
十日市場中学校地域交流事業(夏ボラ)	十日市場中学校の生徒が地域に出て、ボランティア体験をする活動。 生徒と地域の大人が、互いを知り、地域全体で子どもたちの成長を見守っていくため、十日市場の公共施設、地域団体、NPOなどが夏休みに受入れを行っている。	・平成17年度開始。 ・青少年育成協会(現よこはまユース)からの声掛けにより、モデル校として十日市場中が手を挙げた。 ・地域と中学生の顔の見える関係をつくるのが目的だった。 ・当初の事務局はよこはまユースであり、職員がコーディネート役であった。	・当初は校長先生と専任先生の熱意で始まった。 ・夏休みに生徒の自発的なボランティアを地域でさせるということは英断だった。 ・子どもたちがボランティアを地域ですることによって変わったのを目の当たりにして、先生方も夏休み中に見て回ってくれている。 ・ <u>地域と関わることで、先生たちの視野も広がる。</u>	・中学校は地域の中心的なシンボルであるが、中学生は地域との関わりが薄くなる時期。 ・ <u>中学生は地域の大人に「ありがとう」と感謝されることで変わっていき、大化けする。</u> 《事例》 ・ボランティアに参加した男子生徒が、小さな子どもの面倒をよく見て、地域の大人たちから感謝されることを通して一生懸命になり、やがて保育士を目指して専門学校に進んでいった。現在は保育士として頑張っていると思う。	・ <u>大人も中学生を通して地域とつながるきっかけになり、大変意味がある。</u> ・ <u>団体同士も互いの活動をよく知るようになる。</u> 《事例》 ・考え方に違いがある団体同士でも、子どもの受入れをするうちに互いを知るようになり、活動を理解し協力し合うまでになった。 ・子育て支援拠点(いっぽ)も設立当初は、地域とのつながりもなく、事業をなかなか理解してもらえなかったが、交流事業に参加することで受け入れられたように感じる。	・事業開始から4～5年経ち、委員会形式にして、世話人と事務局を数名決めて行った。現在は、いっぽの松岡さんが事務局を担うようになったが、今もユースは繋がってくれている。 ・現在、 <u>事務局としては中学校の協力もあり、無理をしないでやれている。</u> ・定例会を3回(夏ボラ前、11月、2月)忘年会、先生方や委員の歓送迎会をして、親睦を深めている。 ・事業の運営に関してはお金はほとんどかかっていない。	・ <u>地域を良く知り、地域に受け入れられる、熱意あるコーディネーターが必要。</u> ・何か始めたくても動き出せていない人を見抜き、やらせてみる力が必要。 ・ <u>地域のキーマンは必ずいる</u> ので、助けを得ること。 ・ <u>学校の協力を得ること。</u> ・お店の手伝いや仕事ではなく、 <u>ボランティアに触れさせることが大切。</u> ・ <u>広げ過ぎず、顔の見える範囲で行うこと。</u>	よこはまユース、中学校の校長先生、PTAの元会長、地域の自治活動をしている団体やNPO法人、そしてこの事業が始まった次の年に十日市場に子育て支援拠点ができ、その施設長が、様々な支援や人をつなぐ役目を担うようになった。		
井土ヶ谷リビングラボ	ビジネスの視点をもった地域活動をテーマとして、協働について知恵を出し合ったり、パートナーを見つけたりする場。現在、市内で15のリビングラボが活動中。 井土ヶ谷リビングラボは2～3か月ごとに開催。企業、地域団体、教員、子どもなどが参加している。井土ヶ谷リビングラボから生まれた取組の一つに空き家活用があり、コミュニティスペースとオフィスが一体となった建物が地域で活用されている。	・平成29年度開始 ・それ以前から「井土ヶ谷会議」として活動していたものを、政策局共創推進課関係長からの誘いでリビングラボに銘打つようになった。	・小学校から受けた相談(例:総合学習の受入れ)について、「こういう話が来たから、みんなでやろう」と地元企業を巻き込む場になっている。 ・ <u>知らなかった学校の先生と出会う場である。</u>	・子ども達に変化を与えるアイデアが話し合われているが、 <u>子どもが連続して参加するのは1、2回である</u> 。 《事例》 ・地域が「働きに来る場所」から「自分が住むかもしれない場所」に考え方が変わった。 ・大人が描いた絵日記(夢や目標)を子どもに評価してもらおう。褒められると嬉しいし、言ったからにはやらなくてはいけないと感じる。	・ <u>従業員が地域に目を向けるようになった。</u> ・ <u>子どもに夢を語ることでやる気になった。</u> 《事例》 ・地域が「働きに来る場所」から「自分が住むかもしれない場所」に考え方が変わった。 ・大人が描いた絵日記(夢や目標)を子どもに評価してもらおう。褒められると嬉しいし、言ったからにはやらなくてはいけないと感じる。	・「井土ヶ谷会議」の頃から、(株)太陽住建が中心となって運営している。 ・営利の視点が前面に出る参加者がいると、協働の場ではなくなってしまう。その <u>かじ取りが難しい。</u>	・ <u>毎回違う人が参加すること。</u> ・ <u>地域のハブになっている人に声をかける。</u> ・ <u>やりたいからやっている。</u> やらされ感ではできない。 ・ <u>やりたいと思っている人をいかに巻き込めるか。</u> ・ <u>本業と一体化した社会貢献を考える。</u> ・そのほか、 <u>副業で「本当にやりたいことをやる」という視点。</u>	河原 勇輝(株式会社太陽住建 代表取締役) ・横浜市磯子区出身 ・外構工事に就任後、20代で独立し会社を建設 ・自分の企業は地域に愛されてこそ成り立つと考え、地域貢献企業として活躍するようになる。		
子どもアドベンチャー	市内の小・中学生を対象に、キャリア教育の視点から、「働く」ことや、様々な社会体験を通じた「人との交流」の場と機会を提供するとともに、体験を通して、子どもの夢を親子で語り合うなど、「親子のふれあいのきっかけづくり」を目的とする。夏休み期間を利用して、横浜市役所をはじめとした公的機関や民間企業等の協力を得て、毎年開催している。	平成8年度から文科省が「こども霞ヶ関見学デー」を行っており、本市でも、平成16年度からの2学期制の導入に伴い実施された「秋休み 子どもの居場所づくりキャンペーン」の一環として事業を開始。 平成18年度から、より多くの子どもが参加できるように夏休み期間の実施に変更した。	・イベントチラシの配付	・仕事(働くことの意義)について、体験することにより理解することができた。 ・他の仕事についてももっと知りたいなどの意欲の向上が見られた。 ・チャレンジすることの大切さに気付いた。 <u>(非認知能力の向上)</u>	・子どもアドベンチャーへの出展を通じて、 <u>子どもと社会の関わり的重要性に気付いた。</u> ・ <u>地域とのつながりや地域貢献の重要性に気付いた。</u> ・仕事に対する誇りや、意欲の向上 <u>(職員の仕事に対するモチベーションの向上)</u> が見られた。	1. 教育委員会事務局の役割 ・イベントの主催 ・参加団体の募集や調整 ・イベントチラシの作成と広報 2. 参加団体の役割 ・プログラムの実施及び運営(会議や物品の手配を含む。) ・事前申込などによる、参加者の募集と取りまとめや連絡など	・行政だけでなく、一般企業やNPOなどの団体からも参加してもらおう。 ・多くの中小学生、保護者に参加してもらおう。 【実績】R1年度10,558人(保護者4,293人を含む) 【参考】H30年度10,771人 H29年度14,581人 ・行政が主催であることから、学校を通じてイベントチラシを配付できる。	参加団体 横浜市教育委員会 保護者		

【このほか】

- さくら茶屋にししば、さくらカフェの運営(金沢区)
- いずみ野小学校の生産活動(泉区)
- 都筑中央公園の自然体験(都筑区)
- 和泉小学校への伝統文化指導(泉区)

【画像出典】

- 十日市場中学校地域交流事業(夏ボラ):第32期横浜市社会教育委員会議(第2回)配布資料(https://www.ci.ty.yokohama.lg.jp/kurashi/kyodo-manabi/shogai_gakushu/hokokusho/shakai_kyoi_ku/20190423.html)
- 井土ヶ谷リビングラボ:認定NPO法人市民セクターよこはま 調査研究事業 レポート(<http://shimisector.jp/report/ilogaya-living-lab/>)、太陽住建SDGsレポート(<https://www.taiyojyuku.jp/semi-nar/1982.html>)
- 子どもアドベンチャー:横浜市教育委員会事務局生涯学習文化財課内部資料